

- ナレーション わたしはその時、高校生でした。なにしろわたしの家ときたら複雑で、両親と子供の仲が非常に悪く、子供は12人いましたが、そのうち8人が両親の実の子ではなかったのです。一番上の兄の隆は医者で、当時ベトナムで、赤十字の仕事をしていたクリスチャンでした。わたしたち兄弟は、両親と離れてその兄の家で暮らしていましたが、高校生のわたしにとって、両親と離れて住むことはつらいことでした。学校では至極まじめなわたしも、家に着くやいなや一変し、日ごとに悪い道に足を突っ込むようになってしまいました。
- 中山恵子 ちょっと出かけてくるわ。
- 兄隆 もう夕方だぜ。どこへ行くんだい？
- 恵子 ちょっとそこまで。お兄さんに関係ないわ。
- 隆 そんなこと言うもんじゃない。恵子のことは兄さんの責任なんだ。このところ夜、帰りは遅いし、和彦も心配しているんだぞ。一体どうしたんだい？
- 恵子 心配なんかしてくれなくっていいわ。もう高校生だし、自分のことは自分で考えます。わたし、ただ自由になりたいだけなの。
- 伊藤 (オフ) 恵子、行こうぜ。
- 恵子 あ、伊藤君だ。じゃ、お兄さん、ちょっと行ってきます。
- 隆 恵子、めぐ…。
- 高橋 恵子、お前、来週から学校の試験だって言ってたじゃないか。大丈夫か？
- 恵子 平気。どうせいい点取ったって、だれも喜んでくれやしないもん。それよか、今晚バンドやってるのどこ？
- 伊藤 原宿のディスコ「チロル」だ。「ザ・サブマリNZ」が出てるぜ。
- 恵子 わあ最高！ 思いつき踊りましょうよ。
- 音楽 (ディスコミュージック)
- 恵子 (時々、歓声)
- ナレーション こうして、わたしの生活は日に日にすさんだものになっていきました。こんなわたしを、2人の兄は心から心配してくれました。先ほどの和彦っていうのがそのもう一人の兄で、そのころ大学の医学部に行っていた彼も、熱心なクリスチャンでした。
- 和彦 兄さん、恵子のやつ、今夜も遊びに出てるんでしょう。
- 隆 うん。止めるのも聞かずさっき飛び出していった。あいつのためにはいつも祈って、なんとかまじめな子に願ってるんだが、このごろはますますかたくなになって、ほとんど困ってるよ、和彦。
- 和彦 僕も兄さんもそうだったから、あいつの気持ち、分からないわけじゃないんだけど、教会に誘っても、「そんなの弱虫の行くところよ」って、てんから聞こうとしないし…。やっぱり両親がいないのが寂しいのかなあ。
- ナレーション この2人の兄は、わたしが非行に走っていく姿をととも黙って見てはくれませんでした。なぜなら、この2人も実は、以前は新宿辺りで暴れ回っていた不良だったからです。2人は回心したあと、ある決心をし、寂しさや虚しさから非行に入っていく高校生たちの相談相手になっ

たりしていたのです。しかし、わたしはそんな兄たちのわたしへの愛を少しも理解していませんでした。そのころの日記にこんな一節があります――。

恵子(モノローグ) (エコー)11月22日(火曜日)。今、夜11時半。伊藤君に誘われて、新宿で初めてお酒飲んじゃった。なんか、とても陽気になったけど、今、ひたすらにむなしい。頭の芯が少し痛い。どうしてわたしだけがこんなに不幸なんだろう？ こんな風に生きていって、なんの意味があるんだろう？ 兄たちは、「聖書読め」「神は愛だ」なんて、顔見るたびに言うけど、わたしの気持ちなんか少しも分かってくれない。ほんとにわたしのこと考えてくれるのなら、どうして両親と仲直りして、一緒に住めるようにしてくれないんだろう？ 神の愛なんてとても信じられない。頼れるのは自分だけ。でも、その自分がダメになったら…？

ナレーション わたしは、覚えているだけで7回の家出を試みましたが、そのたびに、この2人の兄たちに連れ戻されました。こうなると、わたしもあらゆる手を用いて“脱出”しようとし、万全の作戦を立て、8回目は、だれにも居場所が分からないように家を抜け出たのです。しかし、それがこんな結果をもたらすとは、夢にも知りませんでした。

音楽 (「トッカータとフーガ」(バッハ)冒頭)

ナレーション 兄の和彦は、わたしを捜しながら、同じように非行に走っていて、時々兄が相談に乗ってあげていたある女子高生のところに行きました。

和彦 梨沙、どうだい調子は？ お父さん、この間のこと赦してくれたかい？

梨沙 ……

和彦 どうしたんだい？ なんだか思いつめたような顔して。

梨沙 中山さん、あたしのこと、本当に考えてくれるの？

和彦 もちろんだよ。君だけじゃない。サッチンニモケンジにも、イエス様を信じて、なんとか立ち直ってもらいたいと思ってる。それにまた妹の恵子が…。

梨沙 (さえぎるように) そんなのイヤ！ あたし、あたし、中山さんの愛が欲しい。生きてる証のないこんな暮らし、もうあたしダメ。中山さん、あたしと一緒に死んで！

ナレーション 彼女の手には刃物が握られていました。

和彦 バカなことをするんじゃない。梨沙、さ、それを貸したまえ。…うっ！（腹を刺される）

きゅ、救急車を呼ぶんだ。さ、早く(注・梨沙を殺人者にしないため)。(意識を失いながら)り、梨沙。一つだけ約束してくれ。死ぬな。いいか、死ぬんじゃないぞ。

梨沙 和彦さん…。(わーっと泣き崩れる)

効果音 (救急車のサイレン)

ナレーション 兄はすぐ入院しました。残った兄弟たちは、わたしを必死になって捜しましたけれど、わたしは自分の立てた万全の作戦によって、完全に姿を隠していました。

兄は重体で、担当の医師も半ばあきらめるほどでした。

医師 傷が腹膜に達しています。それに出血がひどい。お気の毒ですが、あと何日もつか保証できません。

ナレーション わたしが、彼が病院にいると知ったのは、友人に聞いてでした。驚いてすぐに病院に駆けつけましたが、わたしが見てさえ、彼の命は長くないと分かる状態でした。兄はそれでも笑いながら、彼を刺したあの、わたしと同じ年の少女のことを心配して言うのでした――。

和彦 恵子、彼女を恨んだりしてはいけないよ。かわいそうな子なんだ。僕二万一のことがあったら、彼女のためにできるだけのことをしてあげてくれないか。

ナレーション わたしはその晩、独りで思いっきり泣きました。兄がいつも「神は愛なのだ」と言っていた言葉の意味が、初めて分かったような気がしたのです。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション 兄は、それから3日後に天に召されましたが、わたしたちに多くのキリストの愛を残してゆきました。

兄の葬式は、キリスト教式で行われました。わたしたち兄弟は、その時、非常に気持ちが高ぶっていました。みんなが彼を好きだったので、ずいぶんと涙を流したのです。ことにわたしは、兄が死んだのはすべて自分の責任であると思いつめて、胸もふさがる思いでした。ところがただ一人、泣かないどころかバカに張り切っているようにさえ見える人がいました。一番上の兄、隆でした。その兄の姿が、わたしたちには気に障って仕方がありませんでした。

浩二 兄貴は偉ぶってるよ。信仰を持ってた和彦が死んだのに、ちっとも悲しんでやしないじゃないか。

恵子 お兄さんは、結局、和彦兄さんのことを愛してなんかいなかったのよ。そうしか思えないわ。

ナレーション それから3週間くらい、だれ一人、一番上の兄に自分から口を聞こうとするものはありませんでした。

ある日の真夜中、確か午前1時を回っていたと思いますが、わたしはのどが渇いて、台所に水を飲みに行きました。一番上の兄の部屋の前を通ると、隙間から明かりが漏れています。“ああ、まだ起きているんだな”と思いながら、何気なく部屋を覗き込んでみました。その時の光景を、わたしは一生忘れることができません。兄が、ベトナムの戦火の中で、3年間も働いていたあの厳しく強い兄が、歯を食いしばり、押し殺したような声ですすり泣いていたのです。

隆 (涙で途切れ途切れに) 和彦。おれが、おれがお前をどんなに愛していたか、分かってくれるだろう？ なあ、和彦…。

ナレーション その声は、心の底から響いてくる悲しみの声でした。

隆 (泣きながら) お前は、いまわの際まで、自分を刺したあの子のことを心配し続けて…。最後の息の下から恵子や一人一人のために祈って…。和彦、お前ってやつは…。おお、神よ！

ナレーション わたしはその時、初めて兄の涙を見ました。だれよりも死んだ兄を思いながら、それを隠して、わたしたちを引っ張っていかなければならなかった兄。彼のバカに張り切ったように見えた姿は、わたしたちのためにと思ってた、彼の“愛”だったのです。

音楽 (エンドミュージック)

ナレーション わたしが、イエス・キリストを救い主と信じ、バプテスマを受けたのは、それから間もなくのことでした――。

聖書の言葉 まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみ実です。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。(ヨハネの福音書 12:24)

<完>